
記憶のカケラ

ニナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

記憶のカケラ

【Nコード】

N7267T

【作者名】

二二ナ

【あらすじ】

記憶をなくした元人間マイナンと探検隊の元人間プラスル。2人で再会するためにそれぞれの冒険が始まる！時には絶体絶命のピンチも！？ミーナ編、あいる編、交互に更新しています。今はあいる編をやっています。

ことのはじまり

夢を見た

フランスのような街並にたたずむ私

歩いているのは皆ポケモン

私もポケモンの姿なのかな？

私はベンチに座る

それを待っていたかのようにリーフィアとイーブイが近づいてくる

リーフィアが私に言う

「あなたは何処から来たの？」

私は………

また同じ夢だ……

どうしていつもリーフィアとイーブイなんだろう

私、チラチーノの方が好きなんだけど

まあいいや

時計を見るとAM7:23と書いてあった

今日は休みの日、ホントなら8時くらいまで寝ててもいいんだけど
いまさら2度寝する気にもならないし……

朝ご飯でも食べよ

キッチンには麻美ちゃんがいた

「美衣奈ちゃん、おはよう」

「おはよう、麻美ちゃん」

「私、出かけるから留守番よろしくね。今日も遅くなると思うわ」
「うん」

「昴たち大丈夫かしら……」

「あの……」

「美衣奈ちゃん、昴たちのことよろしくね!!」
そう言つて麻美ちゃんは慌しく出かけていった

私の名前は北山美衣奈、高校2年

家族は父、母、兄2人に双子の弟、妹

私は実は預けられっ子

私が生まれてすぐ実のお母さんが死んじゃって
実のお父さんが9年前にこの家に私を預けたの
今の家族はお父さんの弟の家族

私は今の父と母をお父さん、お母さんとは呼ばない

その代わり透さん、麻美ちゃんって呼ぶ

兄は昴さんと響くん、弟は翔くん、妹は鈴ちゃんって呼んでる
預けられっ子だからって学校でもいじめられてる

いっそポケモンにでもなりたいよ
叶うわけ無いけど

朝ご飯を食べてたら昴くんが起きてきた

「おはよ、美衣奈」

「あ、おはよ」

.....

ハイ、会話終了

元々昴くんは無口だから、まあいつものこと
困るのが響くんの方で.....

「おはよー美奈っち」

来たっ (>0<川)

「うん、おはよー」

「今日の朝ご飯何？」

「え、トーストとかサラダとか.....」

「母さんは？」

「出かけたよー」

「そっかー。ねーねー美奈っち・・・」

「コラ響、美衣奈困ってるだろ」

「あ！そっかゴメンゴメン」

「いいよ、大丈夫」

朝から質問攻めは疲れる

響くんみたいな人少し苦手だし

とりあえず愛想笑いしとく

そしてここは退散しとくべき！！

「私、部屋戻るね。パン、翔くんと鈴ちゃんの分残しといてね」

ふー

やっぱし1人って落ち着く

今日は何しよっかな

あ、パソコンやる

コメ来てるかな???

私はパソコンの電源をつける

その時、1匹のトイプードルがぴよこんと起き上がった

「アン」

「あいる！起きたんだね」

「ワンワン！」

「ご飯だよね、ちよっと待って」

あいるは私の唯一のリアルでの友達

透さんがあいるを買ってくれるまで私に友達なんていなかった

「ハイ、どうぞ」

「ワン」

透さんは会社の社長

それが日本有数の会社だからすごい

透さんは何でも買ってくれる

このパソコンもあるも透さんが買ってくれた

昴くんや響くん、翔くん、鈴ちゃんもそれぞれなにかしら動物を飼

っている

すごいよねこの家

常識外だわ

「ワン！」

「あ、食べ終わった？」

「ワン、ワン」

「散歩？まってね、うごちよこつとやらせて」

「ワン」

私はうごメモのサイトを開いた

DSからやってもいいんだけどパソコンの方が画面大きいからいつ

もはこつちでやってる

ネット上では、ミイって名乗って活動してる

「あ！のばとからコメ来てるー！」

のばとは私の初うご友のこと

偶然にも同じ県ってことですごく盛り上がった

会ったことも無い友達だけど

すごく仲がいい

「よし！じゃあおさんぽいこつか」

次の日

学校の昇降口で同じクラスの鳩村悠乃はとむらゆなのと会った

「おはよう北山さん」

ビックッ

「あら、そんなに驚かなくてもいいんじゃない？」

悠乃がクスクス笑う

私は逃げるようにその場を立ち去った

私をいじめてるグループのリーダーが悠乃

そんなやつと会って平然とそこにいろっっていうのが無理

とりあえず視聴覚室に逃げて携帯を開く

「のぼと、今ツイッターやってるかな？」

さすがに朝はやってないだろうと思いつつも書き込んでみる

『のぼとー今やってる??』

すぐに返事が来た

『やってるよ〜 ミイおはよう^^』

『おはよ!さつき苦手な子に会っちゃった 朝からサイアクー』

あえていじめられてる子とは書かない

書けるわけない

『大丈夫?落ち込むなー』

『ありがとう?のぼと優しい・・・』

『そうでもないよ?さ、今日も1日がんばろあ?。+』

『うん!がんばろう。+?』

やっぱりのぼとと話すと落ち着くし、元気が出る

私は携帯を閉じた

教室に行くと悠乃たちが話してた

「悠乃お〜まだ???」

「今終わったしー」

「何してたの?」

「ツイッター」

「え〜めんどくない?」

「そんなことないし〜」

何か苦手だなあの会話

そう思っていたら悠乃が話しかけてきた

「北山さん、あなたをみると気分が悪くなるの、そごどいてくれない?」

「あははっ!言えてる〜」

「悠乃サイコー!」

「ほら、はやくどきなよッ!」
ドンッ

「いたっ!」
頭をおもいきり机にぶつけた
視界がかすむ

「っていつか、あんたなんかこのクラスに必要ないんだから出て行きなさいよ」

悠乃があたしを蹴る

あたしはまた頭をぶつけた

「いつまで床で寝てるのおく?」

「早く出て行きなさいよ」

「はやく・・・」

キーンコーンカーンコーン

チャイムが鳴って先生が入ってきた

「やばっ!」

「席につけー、ホームルームやるぞー」

「先生」

「なんだ、北山」

「気分が悪いので保健室行ってきます」

そういつて教室を飛び出した

「はあ、はあ」

また視聴覚室に来ちゃった

そっだ!いまのぼとツイッターやってるかな?

のぼととすごく話したい

『のーばと!ー!いるかい?』

『いつるよー』

いた!なんかホッとす

『今何してる?』

『ホームルームだよ ミイは?』

『あたしもホームルーム』

『ねえねえミイ、私たちもう親友だよね？』

『何？いきなり』

『本名教えあおうよ！』

『いいよ！のぼとからね！』

『あたしの本名は鳩村悠乃って言うの』

？！悠乃？！まさか・・・

『次、ミイだよ』

えっと、どうしよう・・・まさか本名言うわけじゃないし・・・

『あたしの本名は河井麻美だよ』

うつつ、とっさに麻美ちゃんの旧姓使ってしまった

麻美ちゃんゴメン！

『麻美っていうの？可愛い』

『そう？ねえ悠乃ってどこ高行ってるの？』

『うーんと、真島まじま高校だよ』

ハイ、悠乃決定

とりあえず

『ごめん！次移動教室なんだ！またやるっ』

そう打って携帯を閉じた

そのあと私は保健室に行った

私は顔色がかなり悪かったらしく

心配した保健の先生から家に電話してもらって帰った

はあ

酷いよ、こんなの

信頼していた友達が悠乃だったなんて

「くうーん」

「あいる」

「わん」

「励ましてくれてるの？」

「わん！」

「ありがとう・・・！！！」

私はあると一緒に寝た

「ねえ、起きて」

「う、うん」

目を覚ますとそこは青い空の真ん中だった

目の前にはムンナがいた

「え？何？何処？誰？」

ムンナはくすつと笑って答えた

「ここは夢の中よ私の住む世界でもあるわ」

「ゆ、夢の中あ？」

「そう、私は人間の願いを叶えているの、あなたは美衣奈ね」

「そ、そうよ！そっちの名前は？」

「そうね・・・まあ、ユメって呼んで」

ユメ？なんかそのまんまじゃないですか

「じゃあユメ、あいるはどこ？」

「あいる？」

「茶色い犬よ」

「ああ、あの子は帰したわよ」

「嫌だ！連れてきて！！」

つい我を忘れて叫んでしまう

「どうして？」

「だって、あいるはたった一人の友達だもん」

「そういう訳ね、ならいいわ」

ユメってよく分からん

単純なんだか考え深いんだか・・・

ユメがスツと目を閉じた

何かをぶつぶつ言ってる、よく聞こえないけど

すると、ユメの隣にピンク色のもやもやの塊が現れた

「はっ!!!」

そうユメがいうともやもやがはじけて中から可愛い女の子が現れた

「え？女の子？あいるは？」

女の子は駆け寄ってきて言った

「私があいるだよ！美衣奈！」

「うそ！？何で人間の姿なの？」

「私がユメにお願いして人間ってことにしてもらったの」

「人間に？」

とつさにユメの方を見る

するとユメは頷いて言った

「そうよ、あいるがどうしても人間がいいって言うから変えたのよ、

つまりこの子は元から人間だったってことになるわ」

「そうなんだ」

ユメは急に真顔になって言った

「美衣奈、あいる、2つにひとつよ」

「え？」

「へ??？」

ユメはゆっくり言った

「この後、ポケモンとして過ごすか、現実に戻るか」

そんなのもう決まってる

私とあいるは一緒に言った

「ポケモンとして過ごす!!!」

「分かった」

次の瞬間、真っ白な光に包まれた

ことのはじまり（後書き）

ポケモンとして生きると決めた美衣奈とあいる
2人はどのようにして生きてゆくのでしょうか

読みにくいですね・・・

ごめんなさい！

1話 私は誰なの？

「んっ、んん」

はっ！しまった！寝ちゃった！！

しかもこんな草原の真ん中で！

早くしなくちゃ・・・

え？何をするんだっけ

てかここ何処？たしか、えっと何だっけ、えっとえっと・・・

「痛っ！」

何、今の頭痛

頭が割れるかと思った

！もしかして記憶が無い？！

そんな、まさか・・・

まてまて自分、落ち着け

私は人間でしょ

私の名前は・・・何だっけ？

やばい！本当に分からない！！

ふと、何気なく自分の体の見下ろした

！！！！？

「何で・・・」

私の手は人間の手じゃなかった

今すぐ鏡が見たい

私、今どんな姿なの？？

とりあえず歩こう

歩いていたらどこかに着くもの

私は行く当ても無いまま歩き出した

「はあ」

何時間歩いたんだろ

いやもしかしたら数10分かも

何も無いから時間の経過が分かんない

ぐうっ

お腹減ったし

木の実とかでもいいから落ちてないの？

でもそこにあるのは一面緑の草原だけ

木の実なんて見当たらない

ふと、前を見ると向こうにピンク色のところがある

あそこに行ったら誰がいるかも！！

そう思ったら急に元気が湧いてきた

早く行こう！自分が何ものか知りたいし、お腹減ったし！！

「わあっ！」

遠くから見たピンクのところは花畑だった

綺麗・・・なんていう花だろ・・・

がさつがさがさつ

誰がいる！

「ねえ！誰がいるの？」

ぴよっ

草の陰から3匹のミミロルが顔を出した

安心して力が抜け、倒れる

すぐミミロルが駆け寄る

「大丈夫？」

私の意識はここまでだった

ふわっ

ん、あつたかい・・・

「それで、このマイナンは何処から来たんでしよう？」

「それは、この子が起きてから聞くことにしよう」

私マイナンなのか・・・

それより・・・

「あの・・・」

「あ！起きたわね、大丈夫？」

目の前には、エーフィとチラチーノがいた

2話 決めることは決めなくちゃ!

「え、あの・・・」

「あ、ごめんなさい!びつくりしたでしょ」
「エーフィがあやまる」

「君に聞きたいことがあるんだ。いいかい?」
「すぐ、チラチーノが話しかけてくる」

「そのまえに・・・」
「?」

「お腹へった・・・」

我慢できなくなつて、本音を言った

エーフィは一瞬驚いてすぐ笑顔になつた

「そうね!すぐ準備するわ」

「さ、たくさん食べて!!」

「うわ!何この料理の数」

「これを、さつき作ったの?!」

「いや、もう我慢できない」

「いったただつきまーす!!!!」

「はずかしいけど私はすごいいきおいで料理を食べた
がつつく、つてこつこつを言うんだよね」

「いくら食べても料理は減らない
いくらでも、食べれそう!!」

「・・・だけど、限界!もうお腹いっぱいだし」

「ふふつ、たくさん食べたわね」。見てて気持ち良いくらいよ
「えっ!そんなに食べてました?!」

「いまさらだけではずかしい¥¥¥」

「チラチーノが話しかけてきた」

「じゃ、そろそろ質問してもいいかな？」

「あ！はい」

急に緊張しちゃう

「そんなにカタクならなくていいよ」

「はい」

「君は何処から来たの？」

「分かりません・・・」

私はうつむく

「じゃあ名前は？」

今度も分らない

私は首を横に振った

「そうか、何も憶えてないのか・・・」

「まって、私1つだけ憶えてるの！」

「何？」

私は息を吸って言った

「私は元人間だよ」

と言ってあわてて語尾を敬語にする

「元人間です・・・」

ちらつと2人の方を見る

どっちも啞然としてる

「？あの・・・？」

その声で2人は我に返ったようで（笑

「あ！まだ自己紹介してなかったわよね？」

エーフィが言う

そういえば2人のこと何も知らない

「私はミラ、ごらんのとおりエーフィよ」

「ボクはミータ、このギルドの親方をやってるよ」

ギルドの親方？なにそれ

ってかギルドって何？？？？

「ギルドって分からないよね？」

「あ、ハイ」

「うーん簡単に言うと、お助け隊の所属してるところみたいなの？」
「分かんないし」

「まあ、いづれ分かるわよ」

「適当に流された(T―T)」

「このミラって人もギルドの人なのかな？」

「あの、ミラさんもギルドの人なんですか？」

「私はただのポケよ 所属すらしてないわ」

「じゃあなんでここに……」

「今日はミータに話があつたからね」

「このミラさんとミータさんって付き合ってるのかな
聞いてOKなことかな？」

「だめかもしれないけどすごく知りたい!!」

「えーい、聞いてちゃお!!」

「2人付き合ってるんですか？」

「2人はすごいビックリしてる」

「聞いてちゃばかったかな」

「と、急に2人は笑い出した」

「あははっ、そう見える？」

「はい」

「残念 私たちは付き合ってますん!!」

「付き合う以前にミラは結婚してるから」

「え!？」

「け、結婚!？そんなイメージ無いんだけど……」

「ついでに子供3人、だっけ？」

「そうよ 2人、 1人」

「ずいぶん若いお母さんで……っていうか」

「3人!?多っ!!」

「あの……もしかして3つ子？」

「正解」

なんか尊敬*。 +。

「まあ、その話もいいけど君のこれからを考えなくちゃ
そうだ！私これからどうしよう・・・」

住むところとか無いよー！！

「住むところは、こっちで準備するよ」

ドキッ

一瞬心の中読まれたかと思うくらいのタイミングで話す

ミータさん、心読めるのかな？

まあそれはいいとして

住むところがあれば・・・

「でも、問題はそれじゃなくて・・・」

え？

「君自身なんだ」

私が問題？何で・・・

「どうして私が問題なんですか？」

「どうしてって、君記憶も無いしこの世界のこと知らないでしょ？」

ああ、そうだ・・・私こっちの事何も知らなくて・・・

「そんな子を一人で置いとくわけにいかないし・・・ね」

沈黙

みんな、どうしようかそればかり考えてた

「そうよー！！」

急にミラさんが立ち上がる

「何？ミラ・・・」

「私の家に来ない？」

「へ？」

何のことやらさっぱりなんですけど・・・

「私と一緒に暮らしたらこっちのことも私が教えるし、1人になら
ないでしょー！」

なるほど、名案！

「いいね！けど、ミラいいの？」

「いいから提案したに決まってるじゃない！」

「君もいい？」

私的にこんないいことは無い

「はい！いいです！」

これですべて決まった・・・

「ごめん、最後にもう1つだけ・・・」

と、ミータさん

ガクツ、せつかく終わったと思ったのにいいいい (泣

そんな私の考えなどお構いなしに話は進む

「名前、どうする？」

ああ！！名前！すっかり忘れてた！！

まさかずっと『君』って呼ばれるわけにいかないし

名前が無いってかなり不便だよね！！

「そういえばあれがあった！」

そう言つてミータさんは別の部屋に行った

2分位して戻ってきた時には手に紙を握っていた

「これね、君が倒れた時持っていたものなんだ」

え？紙なんて持ってたっけ？

「まあ、ミミロル達が伝えてくれたことだからボクは見てないんだ

けどね」

「紙に何か書いてあるの？」

ミラさん、すぐく見たそう・・・

「じゃあ私開いていいですか？」

「もちろん！君が持つてたんだから」

そう言つてミータさんは私に紙を渡してくれた

私は紙を開く

紙にはたった3文字、『ミーナ』

「ミーナ？誰の名前かしら？」

これ、名前っぽいね・・・

ホント誰の名前だろ？

私とミラさんで悩んでいたらミータさんが口を開いた

「それが君の名前なんじゃない？」

ミラさんも急に明るい顔になって言う

「そうだわ！きつとそうよ！」

2人でうなずきあつてから私に聞く

「君はいい？ミーナっていう名前で」

「ハイ」

実際こんなにしっくりくる名前は無いんじゃないかってぐらぐらピッ
タリな感じがした

変にマリアとか言われるよりずっといい

「じゃあ君は今からミーナだね」

「よろしく！ミーナ！」

「よろしくです！ミータさん、ミラさん！..」

これで決めることは決めた

「じゃあさっそくだけど、家に行かない？」

ミラさんが言う

「はい！行きたいです！」

「じゃあ行きましょ、ミータありがと」

「ありがとうございます！..」

私も改めてお礼を言う

「いやいや、困った時はいつでも来てねー！」

こうして私はミラさんに連れられ

新しい家へ行くことになった

私の心はこれからの希望でいっぱいだった

3話 記憶のカケラ？

「ミラさん」

「何？」

「ここ、何処ですか……」

私達がいるのは森の中

昼間だって言うのに木が生い茂ってるせいで全くと言っていいほど日差しが入ってこない

今はミラさんの持つてるランプが頼り

「何処って森に決まってるじゃない」

ミラさんがあっけんらかんと言う

「この森はどういう特徴があるんですか？」

「そうね……」

ミラさんは歩くスピードを落として話す

「ここは電気タイプが多いかな」

「へえ」

「だから電気の森って言うの」

電気の森……

もしかしてさつきからチラチラ見えてるクモの巣みたいなのってエレキネットだったりするのかな

うわー、気をつけて歩こう

「この森通らないと帰れないんですか？」

いつもこんな所を1人で歩いているのかな

「うーんと別にいいんだけど、近道みたいなの？」

「近道？」

「私の友人に頼むのよ」

こんなところに友達？

やっぱり電気タイプなのかな

「ほら、あそこの家よ」

森の中を10分ほど歩いてみると家が見えてきた
近づいてみると結構大きな家だ

コンコン

「スパーク、いる？」

スパークさんっていうのか

名前からして っばいな

「いるよ」

「入ってもいい？」

「ああ」

ガチャ

「お邪魔します」

「あ、お、お邪魔します・・・」

わりと家具の少ない部屋にいたのは・・・

「サンダー!？」

そう、あの伝説のポケモンサンダーがそこにいたのだ

「あ、ミーナに説明すんの忘れてた」

ミラさんがしまったというような顔をした

「私はスパーク、ミラの古くからの友人だ」

スパークさんがあいさつをする

「あ、私はミーナといいます」

私もあわててあいさつする

スパークさんはニコニコしてた

何か普通のポケと変わらないような・・・

「ミラさんどうやって友達になったんですか？」

私はミラさんに聞いた

「話すと長くなるけどいい？」

「はい、大丈夫です」

~~~~~

昔、ミラが子供だったころ、ミラはブイズだけ集まった一族と暮らしていた。その一族に伝わる話 ふもとの森の奥へは行ってはいけない その話を皆は守っていた。しかし当時一族1のおてんば娘だったミラはわざと森の奥へ行き、スパークに会った

「どうして、此処に来た」

「森の奥に何があるのになって思ったから」

「……今すぐ帰りなさい」

「っ何で!？」

「此処は君のような者が来るところではない」

「嫌だ、帰らない」

「帰らないと言つのであらば」

「バトル!？」

「そうだ」

「いいわよ!その勝負受けて立つ!」

「は?」

てつきりおびえて逃げ出すだろうと思っていたスパークは予想外のこと戸惑った。しかし相手はやる気マンマンなのでとりあえず戦ったら、ミラのちょこまかとした動きに反応できず結局、自滅したという。ミラは自滅したスパークに向かってこう言った。

「あんたって割とヘナチヨコなのね……」

「……五月蠅い」

「私が勝ったんだから1つだけ言うこと聞いてくれない?」

「何だ」

「私と友達になつて!!」

「友達?」

「あなたの戦い方気に入ったから」

「別にいいが」

「私ブイズのミラ!あなたは?」

「私はサンダーのスパークだ」

「分かった、スパークこれからよろしくね」

「ああ、よろしく」

「あの、それってミラさんに負けたから友達になったって事ですよ  
ね」

話を聞き終わってすぐ私は質問した

その質問にはスパークさんが答えてくれた

「そうなるが、私も友達なんていなかったもんでね、嬉しくて友達  
になったんだ」

「そうなんですか・・・」

私も初めて友達ができたとき嬉しかったな・・・

あの時・・・

ズキッ

「痛っ！」

私は突然の頭痛に座り込んでしまった

「ミーナ!？」

「おい、大丈夫か!？」

私の意識はそのまま遠のいてしまった

「ん・・・」

私は見知らぬ部屋に寝ていた

「あ、ミーナ起きた？」

「ミラさん、ここはどこですか？」

「ここは私の家よ」

「そうですか」

私確か・・・

スパークさんの家で倒れて・・・

何で倒れたんだっけ

えっと、友達の話になって、スパークさんが初めての友達で嬉しか

「 たったって言つて、私も初めての友達ができたときは嬉しかったな！  
って思つて……」

「！？私に友達がいた！？」

「これって人間の時の記憶じゃ……」

「ミ、ミラさん……」

「どうしたの？まだ頭痛する？」

「いえ……」

「じゃあ、何？」

「人間の時の記憶、思い出したんです」

「！？本当！？」

「ミラさんが動揺してる」

「でも、ほんの一つで手がかりにならないんじゃないかと……」

「いいのよ、どんなことだったの？」

「私に友達がいたんです。たった1人の」

「私、友達1人しかいなかったのかな」

「つてことは、暗い子だったのかな」

「そう……」

「ミラさんは何やら深く考え込んでる」

「ミラさ……」

「あ、そのことはご飯の後に考えましょ！」

「急にパツと顔を上げて言った」

「ホント喜怒哀楽激しいな……」

「そうですね！」

「今日は「ちそうよ！」」

「「ちそうよ！」？」

「ぐうう」

「タイミングのいいことにお腹がなった」

「ミラさんはフツツと笑って言った」

「さあ、行きましょ」

ふえ〜お腹一杯

おいしいからって食べ過ぎちゃったかな？

太らないよね……

それにしても思い出したときのあの痛み、やばかったなー

毎回あんなのが来るのかな？

それはちよつと困る

「ミーナ、入るわよ」

ミラさんが部屋に来た

「はい、いいですよ」

ガチャ

「これ、見てくれない？」

そう言つてミラさんは一枚の写真をを見せてくれた

その写真にはリーフィアとイーブイがニッコリ笑つて写っていた

「ミラさん、この人たちは……？」

「こっちのリーフィアが私の娘、イーブイのほうは娘の相棒つてと

こかしらね」

ミラさんが指差しながら教えてくれる

「な、名前なんていうんですか？」

私今日、名前ばかり聞いてる気がする

「リーフィアがソラ、イーブイがステラよ」

「ソラちゃんとステラちゃん……」

何かキラキラしてる

きつと毎日楽しいんだろぅな……

「この子達は探検隊なの」

「あ、その探検隊って何ですか？」

さつきギルドでも聞いたけどどうまく答えてくれなかったし

「そうね、たとえば困っていて自分じゃどうしても出来ない事って

あるでしょ？」

「はい」

「その困ったことをギルドに伝えるの」

「はい」

「そうするとそのギルドに所属している探検隊が依頼としてやってくれるの」

「依頼ですか」

「要するにお助け隊ね」

「昼間も同じこと言われたような」

「でも、信頼が厚く強いチームは世界の歪みを調査してたりするのよ」

「世界!？」

「そんなに凄いことなのか・・・」

「でね、話戻すけどソラ達とミーナ、1回会ってみない？」

「へ？」

「ちょうどソラ達に渡したいものがあってまたあの街に行くの、その時に一緒に行かない？」

「あ、会えるんですか？ソラちゃんたちと」

「こんなキラキラしてる子と会えるんだ」

「何かいいことありそう」

「じゃあ、明日また詳しいこと言うわ」

「はい」

「今日はもう寝なさい」

「はい」

「ミラさんが部屋を出てから私はベットに入った」

「今日は色んなことを知った日だった」

「たくさんありすぎてとても長い時間に感じられる」

「明日、いいことありますように・・・」

### 3話 記憶のカケラ？（後書き）

やっと1日の終わりです

3話かかりました（汗）

このままでは先が遠いです

遂に！本編『チームたんぽぽ』と交わります

こういう2話が交わる話初めてです

では！読んで下さりありがとうございました！

#### 4話 能力の目覚め

「はあ、はあ・・・」

私はひたすら走っていた

でもどんなに走っても後ろから迫ってくる影は追いかけてくる  
ため、もう体力が・・・

チカッ

前の方に明かりが見えてきた

よし、あそこまでもう少し！そうしたら助かる

あと1歩・・・

ガクンッ

「きゃあああー!!!」

突然、景色が変わった

そこは明るいところではなく、深い闇の中だった  
私はどうすることもできずにただ落ちていった

「今日も1人、捕まえた・・・」

誰かが耳元でささやく

とつさに横を見るとそこにはゾロアークがいた

「お前も私の幻影に惑わされた1人なのだ」

そんな・・・

私、死ぬの・・・？

まだ何もしてないのに・・・っ

「ミーナ、ミーナ」

私を呼ぶ声がする

「ミーナ！」

目の前にミラさんの顔があった

「大丈夫？すごくうなされてたから心配で・・・」

「あ、大丈夫です、心配かけてごめんなさい」

私、回りに迷惑ばかりかけてる

「気にしないで、じきに良くなるわ」

「はい」

「今朝は木の実ジュースにトーストよ、食べましょう」

「はい、食べます！」

朝ご飯を食べてる時にミラさんが話してきた

「今日は森に行こうと思うの」

「昨日の電気の森ですか？」

「いえ、違う森よ、幻の森っていうの」

「幻・・・？」

「ええ、木の実やアイテムがたくさん落ちているらしいの」

「へえ、そんなところがあるんですか」

「そうよ、一緒に行ってみない？」

「もちろん行きます！」

この世界のこともっと知りたいしね

「じゃあ決まりね、ご飯食べて準備してすぐ行くわよ」

「はいっ！」

「ここから入るのよ」

「普通に、看板ありますね」

「まあ、ただの森だしね」

「そうですね」

私達は森に入っただけ

「木の実、木の実・・・」

そこらへんをキョロキョロ見回していると何か落ちているのを見つけた

駆け寄るとそこには何かの種があった

「ミラさん、これなんですか？」

私は拾った種をミラさんに見せた

「どれ？あーそれは『満腹の種』よ」

「満腹の種？」

「食べるとお腹がいっぱいになるの、反対に『空腹の種』はお腹が減っちゃうの」

「そうなんですか」

このままいくと種の種類って凄くありそうなんですケド

「たくさん拾ったし、戻る？」

ミラさんの持つてる袋にはもう入らないっぽいし、いいよね

「戻りましょうか」

私達は森から出ようとした

するとみるみるうちに私達の周りに黒い影が覆った

「何……、これ……」

ミラさんも、初めての体験らしい

私はとつさに判断して言った

「ミラさん！シャドーボール使えますか？」

「え、ええ、使えるわよ」

「使ってください！」

「分かったわ」

ミラさんはシャドーボールを放った

シャドーボールが当たった部分の影が薄くなった

「今です！突破しましょう！」

「了解！」

私達は影の中から脱出した

でも後ろから影が追ってくる

私達は走った

でも影は追いかけてくる

そろそろ体力がやばいかも……

だめ、もう体力が……

チカッ

前の方に明かりが見えてきた

あそこまで行ったら森から出れる……  
待って！この光景どこかで……

そうだよ、今日の夢で見たんだ

このまま進めば私達はゾロアークの餌食にされてしまう！

「ミラさん！ストップ！止まって！」

「何言ってるの！もう少しで出れるのよ！！」

「ダメ！その先は崖なの！」

ミラさんは完全に惑わされてる

「何言ってるのよ！そんなことあるわけないでしょ！」

私はミラさんの尻尾を引っ張った

「ダメなの！！！」

「放してちょうだ……あっ」

突然景色が変わった

やっぱり夢のとおりだったんだ……

ミラさんの足下は崖すれすれだった

「っ、危なっ！！！」

ミラさんはすぐ安全なところに飛び退いた

私が黒い影を見つめていると影は小さくなっていき、しまいにはあ  
るポケモンの姿になった

「ゾロアーク！」

ミラさんの言うとおりゾロアークだ

「やっぱりあなただったの、ゾロアーク」

「どうして分かった」

「夢で見たのよ、あなたの幻影にはまる私をね」

「チッ」

ゾロアークは舌打ちした

「私の幻影に惑わされないヤツなど初めてだ」

そう言っつてゾロアークはスッと右手を上げた

また景色が変わり、森の入り口に着いた

「これも幻影？」

私は心配になって聞いた

「いや、ただの瞬間移動だ、幻影ではない」

ゾロアークの瞳からしてウソではないだろう

「そう、ありがとう」

ゾロアークはそっぽを向いて言った

「次会った時が最期と思え」

そう言っただけで消えてしまった

混乱しているミラさんに私は声をかけた

「とりあえず、詳しいことは家で話すんで帰りましょ？」

「そ、そうね」

私はミラさんを連れて家に帰った

「たとえ夢で見たとはいえ、私の邪魔をするとは……邪魔なポケモンだ。まあいい、これでこれから先、タイクツしなくて済みそうだ」

「あのゾロアークを夢で見たの？」

「はい、その時はまんまと幻影にはまっけてしまいました」

「ふーん」

どうして夢で見れたんだろう

予知夢みたいなのかな？

「ミーナ」

「はい？」

「私と両手をつないで」

「どう、ですか？」

私とミラさんは手をつないだ

すると、頭の中にある景色が浮かんできた

ミラさんと私とリーフィアとイーブイ、きつとソラちゃんとステラちゃんだろう

後ろには攻撃を受けたような痕のある木が……  
フツ

手を離れたとたんにその景色は途切れてしまった

「何か見えなかった？」

「えっと、ミラさんと私とソラちゃんとステラちゃんがいきました」

「やっぱり……」

「え？」

ミラさんは少し黙ってから口を開いた

「あなたには予知能力があるのよ」

「よ、予知能力!?!」

「ええ、さっき話してた夢もきつと予知夢よ」

「えっ」と、それってムシャーンみたいですね

「そうね、昔から元人間は特別な能力チカラを持ってるって言われてきたから多分それよ」

特別なチカラ……

それは私が元人間っていう印みたいなものなのかな

「とりあえず、明日ミータのところへ行きましょう、調べたいことがあるの」

「はい」

またあのギルドへ

「もしかしたらあの人も……」

ミラさんがボソツと言った

目には涙が溜まってる

そっとしておこう

「私部屋に戻りますね」

そう言っつてその場から離れた

このチカラ、どうやって使おう

両手をつながなくちゃできないなんて不便だし、  
とやるのは恥ずかしいし・・・

難しいチカラを手に入れちゃったな・・・

明日、ミータさんのところへ行くんだ

その時にまた考えよう

## 5話 ふたたびギルド（前書き）

この話から「チームたんぽぽ」目線で行くところかなりのネタバレになります

ネタバレ嫌いな方は読まないほうが良いかと思えます

## 5話 ふたたびギルド

朝

「うん、じゃあそついうことでよろしくー」

ミラさんの声で目が覚めた

誰かと電話してたらしい

「ミラさんおはようございますー」

「あ、ミーナおはよう」

「さつき誰と電話してたんですか？」

「ミータよ」

「何ですか？」

朝からミータさんと電話する理由が見つからない

「あとで分かるわ！それより早くご飯食べて出かけなくちゃ」

トレジャータウン ギルド

「こんにちは、ミータいる？」

ミラさんがギルドにいたポケモンに話しかける

声をかけられたチラチーノは笑顔で答えてくれた

「お兄ちゃんならミラムシティに出かけました、あと1時間くらいで帰ってくるはずですよ」

親方のミータさんをお兄ちゃんって呼ぶから兄妹なんだよね

「そう、じゃあまた来るわ」

「分かりました、お兄ちゃんが帰ってきたら伝えときますね」  
結局また来ることにしてギルドを出た

「予定変更ね、先にソラ達の家へ行きましょ」

「はい！」

私達はまた元来た道に戻った

このトレジャータウンはいろんな国出身の人がいる

隣の国の人から遠く何千キロも離れたところから来た人までたくさんの方がいる

そしてにぎやか

所狭しとお店のテントが張られ見たことも無いものが売っている  
お店の人は親切だし初対面でも優しくしてくれる

いるだけで楽しい

いつかここに住みたいな

「ミーナ、こつち」

ミラさんは大通りから外れて細い道へ入っていった

この道はさっきのにぎやかな雰囲気とは反対に落ち着いている感じがし

どの家の庭にもきれいな花が咲き誇っていてタイムスリップしたようない感じがした

だってあのにぎやかさからここに来たら誰だってびっくりするよ！

「ここよ」

いつの間にかミラさんはある家の前に立っていた

ピンポーン

ミラさんがインターホンを鳴らす

あるんだ・・・インターホン・・・

ガチャ

「どちらさまですか？」

ドアが少し開いてリーファイアが顔を出した

この子がソラちゃんだよ

「って・・・お母さん!？」

突然の来訪者がお母さんで驚いたらしい

「え? うん」

ミラさんは当たり前じゃないという顔で頷く

「何でお母さんがここに?」

「どうしてもたんぽぽに会いたいってポケを連れて来たの」

へ? それって私!?

どうしてもなんて言っていないですよ!!

「誰?そのポケって」

うう、ソラちゃん興味津々じゃないですか・・・  
緊張してきたじゃん

「ミーナ、あいさつ」

ミラさんに小声で言われて前へでる

「は、はじめまして、ミーナといいます」

か、かんじやった・・・

ソラちゃんはちょっと固まった後いきなりしゃべりだした

「何かイメージと違う!!!!!!」

「えっ!?!」

「OP見て楽しみにしてたのにいいー!!」

「OP?あれですか?」

詳しくはうごメモはてな二二ナ作品・チームたんぼぼOPを  
ご覧ください

「説明します!!」

花壇の陰からいきなりブースターが飛び出してきた

「誰ですか?」

ソラちゃんが答えてくれる

「作者、たぶん・・・」

こ、この人が作者さん!?

「あれはミーナの初期設定です!!」

ウインクしながら答えてくる

何だこの人・・・

しかも私の初期設定とか・・・

「分かったからその顔ヤメテ」

ソラちゃんは平然と答える

慣れてるな

「てかさ……」

ソラちゃんが作者を見ながら言う

「設定変わるの早っ！！まだ5話だよ!？」

たんぽぽの中ではって事です

あ、こっちでも5話か

「そこを言ったら終わっちゃうしw」

「黙れ作者」

ソラちゃん怖っ!!

「ソラー」

家の中から声がした

ガチャ

「何の話してるの？」

イーブイが出てきた

この子がステラちゃんだよ

家から出てきてソラちゃん達のほうを見たステラちゃんは啞然としてた

そりゃそうだよ

今ソラちゃんが作者に『ソラービームパワーMAX』っていうのを撃ってるんだから

ソラちゃん見かけによらず怖いなー

でもこれって作者しかやらないのかな

そうじゃないと私倒されるよお

「あなたは？」

ステラちゃんが私に気づいて言う

「あ、私はミーナ、よろしくねステラちゃん」

今度はちゃんと話せた

「どうして私の名前……」

「ミラさんから教えてもらったの」

「ソラのお母さん？」

「うん」

ステラちゃんは私にキャンディーをくれた

「？」

「今から私達は友達！そうでしょ？」

ステラちゃんは笑顔で言った

ずいぶんあっさりと決めちゃうんだね

会ってまだ2分くらいしかたってないけど

でも、この世界での初めての友達……

「うん！」

私達は友達になった

「お取り込み中すみませんが」

「へ？」

振り向くとミラさんが渋い顔で言った

「あれどうする？」

ミラさんの示したほうを見るとソラちゃんが作者と格闘してた

「あ、まだやってたんだ」

「どうやって落ちつかせよう……」

「私に任せて!!」

ステラちゃんが自信満々に言った

## 5話 ふたたびギルド（後書き）

本編とついに交わりました！

本編はマンガなのでそのときだけ多少セリフ多めになったり脚注が必要になったりします

どうかご了承下さい

では次は6話で！

6話 チームたんぼぼ（前書き）

何か日本語おかしいんですけどスルーしてやってください

お願いしますm(\_\_\_\_\_)m

## 6話 チームたんぼぼ

「シャドーボールッ!!」

ステラの右手から黒い塊が放たれた

「!!」

ソラはいち早く気づいて回避する

ドオオオオン・・・

シャドーボールは後ろの木に当たって砕けた

どちらかというの木の方がダメージを受けている

「なっ、何するのよ!危ないじゃない!」

ソラがステラに抗議する

「だって話聞いてくれないし」

「だからってあんな技打ってくる必要ないでしょ!!」

ソラが木を指差して言う

さっきシャドーボールが当たった木

あれ?やっぱり見たことある景色なんだけど・・・

「当たらなかつたら、結果オーライ」

「そういうもんじゃなくて・・・」

「ハイハイ、そこら辺にしときなさいよ?」

ケンカを始めそうな2人の間に仲裁に入るミラさん

「依頼とかあるんじゃないの?」

「そうだった!電気の本森に行かなきゃ!」

思い出して焦り出すソラ

「じゃあまたね!ミーナちゃんバイバイ!!」

ソラはステラを引っ張って走り去っていった

「あんな2人だけ仲良くしてくれる?」

ミラさんが心配そうな顔をして言う

「もちろんですよ!とっても楽しそうでしたもん」

「そう?よかった」

ミラさんがちよつと笑って言う

「そろそろミータも帰ってきたかしら、行きましょう」

「はい！」

私たちはたんぽぽの家を後にした

どうしても気になることが1つ

作者はいついなくなつたんだらう

「こんにちはー」

「あーミラさん！お兄ちゃんなら帰ってきましたよ！」

さっきのチラチーノが出迎えてくれる

「ありがとう、ミータは何処にいる？」

「多分、部屋にいます」

「分かつたわ、ありがとう」

ミラさんはスタスタと歩き出した

私はミラさんについて行った

ミラさんはある部屋の前で立ち止まった

その部屋には『親方の部屋』と書いてあった

コンコン

「はーい、どうぞ」

ミータさんの声が返ってくる

ガチャ

「こんにちは、ミータ」

「こ、こんにちは」

「あーミラにミーナ！ようこそ」

私たちは部屋に入った

「今日は相談があつて来たの」

ミラさんが話し始めた



## 6話 チームたんぽぽ（後書き）

短くてスイマセン・・・

今スランプなもので話が思いつかないんです

ってことで更新さらに遅れます

ご了承くださいm(\_\_\_\_\_)m

## 7話 新たなる敵

「相談？」

ミータさんは首をかしげる

私はミラさんが何を言うか隣で黙って耳を傾けていた

「ええ。昨日分かったことなのだけど、ミーナに予知能力があるらしいの」

「予知能力!？」

ミータさんも私と同じ反応をする

「それもかなり強力よ」

「へえ、やっぱり元人間は違うんだね」

ミータさんはあまり関連のないことに感心してる

「ここから本題よ、このチカラを使って何か出来ないかしら」

「そりゃ占い師でしょ」

間髪いれずにミータさんが返してくる

「そうよね、やっぱりそうなるわよね」

ミラさんもミータさんの意見にうなづく

「あのお……」

私はおずおずと会話に入った

「何？」

「占い師ってことは も来ますよね？」

「当たり前じゃない」

ミータさんもうなづく

「私、 とやるの恥ずかしいんですけど……」

だって両手つながなくちゃいけないんだもん

でもそんなこと知らないミータさんはとんちんかんな返事をする

「え？ミーナ、 苦手？」

「そういうことじゃなくて……」

えっと、どう説明すれば……

「あの、占うとき両手つなぐんです。だからなんとなく・・・」

「そっか、そうだよな〜。」

「じゃあこの話は一旦保留ね」

「そうだね〜」

え？あつさり終わったんですけど

この人たちサツパリしてるよね

「ミラ、次はボクからいい？」

「いいわよ」

場の雰囲気が変わった

多少の沈黙の後ミータさんが口を開いた

「今、この国は危ないんだ」

「え？」

今、危ないって言った？

「ミラは『ヌーヴォラ・ネツビア』、略してヌーヴィアって聞いたことない？」

「ヌーヴォラ・ネツビア・・・、ヌーヴィア」

ミラさんは考え込む

ミータさんは続ける

「そのヌーヴィアはあることを企んでいるんだ」

「企み・・・？」

「そう、それは・・・」

ミータさんは間を置いてしゃべった

「この世界の征服と破壊」

ミラさんが小さな悲鳴を上げる

「破壊ですって!!」

私は直感で思った

これは長い戦いになると・・・

## 8話 別れと旅の始まり

「破壊ってどういことよ！」

「ミラ、落ち着いて」

ミータさんが諭す

「え、ええ・・・、そうね・・・」

ミラさんがさつきより落ち着く

ミータさんは話を続ける

「分かっていることは少ないんだ、どの情報が正しいかも分からない」

「そんな・・・」

きちんとした情報がない中でどうやって戦うんだろう

「ミーナ、こつちに来てすぐですまないのだけど・・・」

「え？」

突然話を振られたこともあり私は固まっていた

次の言葉は衝撃的だった

「この場から出て行くんだ」

「え？ミータさ・・・」

「ここはいずれ戦場になる、たとえならなくてもここにいる限り戦わなければいけない」

そんな・・・

せつかくこの皆さんと仲良くなったのに・・・

「私、戦います！」

怖いけど皆さんと離れるくらいなら・・・っ

「ミーナ、だめだよ」

「っ！」

あっさり断られる

少しは考えてくれると思つたのに・・・

「この際だから言つよ」

「？」

「キミがもとの世界に戻る方法をね」

戻る・・・？

私の住んでいた世界に・・・？

私の表情が変わつたのを見てミータさんが続ける

「昔からポケモン界に元人間の子がやってくるのは普通のことだつたんだ。皆人間時代の記憶を持つていたらしく帰りたいと強く願つたらしいんだ。その願いを聞いた伝説のポケモンたち、エンテイ、スイクン、ライコウはある場所を作り出した。それがティムラの滝だ。」

「ティムラの・・・滝・・・？」

「そう、そこにはあるポケモンが住んでいると言われてるんだ」

「あるポケモン？」

「ディアルガとパルキアね」

ミラさんが答える

「ディアルガにパルキアがどうして・・・」

「人間に戻すには自分の力が必要と感じたからさ」

本能・・・つてやつかな？

「で、ミーナは戻りたい？」

「え？」

「人間に戻りたい？」

「それは・・・」

言葉に詰まる

私は昔の人みたいに記憶が残ってるわけじゃない  
だから特別、帰りたいという気持ちもわいてこない  
でも人間だったから戻らなくちゃいけないのかな・・・

「で、もう一つ」

「何ですか？」

「マイナンの姿で来たってことは対となるポケモン、プラスルも一緒に来たってことになる」

「はあ」

「掟としてはプラスルとマイナンは一緒に帰るっていう条件が追加されるんだ」

「へ？」

「プラスル？」

「私と一緒に来た子なんかいるの？」

「で、でもっ、私1人でしたよ」

「私は草原で1人だった」

「あの場でもう1人いたならすぐ気付くはずだ」

「一緒に来ても同じ場所にたどり着くとは限らないよ」

「そうそう、そのプラスルもこの世界のどこかで暮らしてるのよ」

「そうなんですか」

「もし、戻りたいならまずはプラスルを探すことからはじめないとね」

「世界中をですか？」

「世界中って何年もかかるんじゃない？」

「厳密には4国だね、4国のうちどこかにプラスルはいるよ」

「4国しかないんですか？」

「私の質問にミータさんはちよっと顔を曇らせて言う」

「昔はもつとあったんだけどね、100年前の事故で暗黒物質が溢れてこの星の6割方は住めなくなってるんだ」

「暗黒物質・・・」

「住むことが出来なくなるくらい悪影響をもたらす物質ってなんだろう・・・」

「まあ、とりあえず4国を探すといいよ」

「ミータさんが明るく言う」

「ここは南の国ディオール、他は東の国フリユード、西の国アライア、北の国リザドの3国だよ」

「ティムラの滝はリザドの北部にあるわ」

私は胸が苦しくなった

こんなに優しい人たちが争いに巻き込まれるなんて・・・  
しかもそれを知っておきながら元の世界に帰ろうとするなんて・・・  
・・・私、最低だ

・・・でも、もしあつちの世界で私を必要としてくれる人がいるとすれば、帰れる手段があるのに帰らない私もひどいと思う  
究極の選択ってこういうのを言うのかな

ここに残りたい気持ちもある

でも、私を待っててくれる人がいるなら・・・

「ミータさん、ミラさんありがとうございます」

私は決めた

「私、元の世界に戻ります」

必要としてくれる人がいるとは限らない

でも、このままここにいたら人間の生活から逃げたのと同じ

どんなに辛くても、立ち向かう！

「ミーナ、頑張ってね」

「はい！短い間でしたけどありがとうございます！」

たった3日

でも自分の中で何か変わった気がする

「じゃあこれを」

ミータさんがバックを渡してくれた

「何が入ってるんですか？」

「地図とか食べ物とか道具とかいろいろだよ、使い方は中の紙に書いてあるから」

「はい！」

私は2人に言った

「本当にありがとうございます！」

私はペコッと頭を下げて部屋を出た

ギルドから出ようとすると誰かに呼び止められた

「ミーナちゃん！」

振り返るとチラーミイがいた

「いい情報をあげる！」

そう言っつてチラーミイは私の耳元である言葉をささやいた

「！」

「ね、よかったでしょ」

「はいっ！」

「じゃあ頑張つてね！」

「ありがとうございます！」

私はギルドを後にし、これからの旅に期待を膨らませながら歩き出  
した

## 8話 別れと旅の始まり（後書き）

ここまで読んでくださりありがとうございます！

ここでミーナ編いったん終わりです

次からはプラスル主人公のお話に移ります

## 1話 目指すはギルド！（前書き）

ここからあいる編になります！

ミナ編とは関係ないので此処から読んでもついていけると思いますが  
でも『ことのはじまり』を読んでいただいた方が理解は深まると思  
います

では、あいる編どうぞ！

## 1話 目指すはギルド！

気が付いたら街中にいた  
何で？

さっきまで一緒にいた美衣奈はどこにもいない  
とりあえず噴水のトコに座る

記憶の整理をしなきゃ

あたしはある

最後の記憶だと人間だけど・・・

うん、人間でいいや

正確には人間じゃないけど人間の方が好きだし

友達に美衣奈

夢の中で美衣奈とユメと話して、ポケモンとして暮らすって決めて・

・

そしたらいきなり白い光に包まれて・・・

で、ここにいた

あー、もう訳分かんない！

なんであたしはここにいるの！？

っていうかあたし何のポケモンだろ

お店のショーウィンドウに映った姿は・・・

「プラスル！？」

周りにいたポケモンたちが振り返る

私は小さい声で謝りながらその場を離れた

何で！？

何が起こったのかわからない！

ポケモンとして暮らすって言っても何も知らない状況から始めなきゃ

いけないの？

美衣奈と一緒にじゃないの？

誰か、理解してくれる人いないの？

ドンッ!

「わあっ!」

「きゃっ」

前をよく見ていなかったせいで誰かとぶつかってしまった相手のタブンネが持っていた紙袋が落ちる

中からリンゴとか木の実とかが転がり落ちる

「ご、ごめんなさい!」

「大丈夫よ、あなたにケガはない?」

「ないですけど、それより果物・・・」

さっきまで果物が入ってた袋は破けてしまっている

「えっと、あたし運ぶの手伝います!」

「え?でも・・・、いいの?」

「はい!」

どうせやることもない

それなら人助けしてたほうがずっといい

タブンネはにっこり笑って言った

「ありがとう」

あたしたちは手分けして果物を持った

「どこまで運びますか?」

「大通りの先にある家までよ」

「分かりました」

大通りがどこで家がどこかも分からないけどついていけば分かるよね  
あたしたちは歩き出した

「ねえ、プラスルさん」

「あいるって呼んでください」

「じゃあ、あいるちゃん、あなた此処の人じゃないでしょう?」

ピクンッ

耳が条件反射でびくびくする

まさか元人間ってこんなに早くばれるとは思わなかった

あたしの顔を伺っていたタブンネが続ける

「やっぱりね、プラスルなんてここら辺にいないからそうかなって  
思っただの」

「はぁ・・・」

「あなた記憶は？」

「あります」

「じゃあ、まだ良いわね、たまに記憶をなくしてる人がいるのよ  
あたしは美衣奈のことを思い出した

記憶、失くさないよね・・・

「もう1つ、あなたともう1人いたでしょ」  
ピクンッ

まただ

不意打ち食らうと耳が動くの？

じゃなくて、どうして美衣奈のことまで知ってるの!?

「なんで、知ってるんですか？」

「当たり前よ」

「当たり前・・・？」

「プラスルとマイナンは2つで1つですもの」

あ、美衣奈のことまでは知られてないみたい  
ちよっと安心

「あ、ここよ」

タブンネが立ち止まる

「ここですか」

タブンネがドアをノックする

コンコン

「レイさーん」

どうやらタブンネの家ではないらしい

ガチャ

ドアが開いて中からジャローダが出てきた

「あら、ノアさん！」

「こんにちはレミさん、今日は近くまで来たから……これ、どうぞ」

「木の実をこんなに！あ、このカゴに入れてくれる？」

あたしは持ってた木の実をカゴに入れた

ふー、重かった

「母さんは休んでるわ、ところで……」

レミと呼ばれたジャローダがあたしの方を向く

「あなたは？」

「あ、あたしはあいるです、いちおー元人間です」

「そうなの！ノアさんの所にいるの？」

ノアと呼ばれたタブンネが答える

「ううん、さつき出会ったばかりよ」

あたしはうなづく

「それはギルドに行ったらいいかもしれないわ」

「ギルド？」

「ええ、その親方様はとても物知りなの、解決法を教えてくださいわ」

「そうなんですか！」

あたしの心は弾んだ

もしかしたら美衣奈を知ってるかもしれないと思った

「で、ギルドはどこにあるんですか？」

「あそこよ」

レミがしつぽであたしの後ろのほうを示す

その先には丸いドームみたいな建物があった

「あれが『ギルド』よ」

「ギルド……」

「本当は『アレインギルド』って言うんだけどそっちの方が覚えやすいでしょ？どうせ1つしかないし」

ジャローダが茶目っ気たっぷり言う

きつと街の人は皆そう呼んでるんだらう

「ギルドまでは1本道なのすぐ分かると思うわ」

「ありがとうございます！」

あたしはお礼を言っつてその場を離れた

「気をつけてね、途中でモンスターハウスがあるけど・・・」

「大丈夫です！」

そのときあたしは知るよしもなかった

モンスターハウスがどんなに恐ろしいものか・・・

1話 目指すはギルド！（後書き）

待ち受けるはモンスターハウス！

## 2話 モンスターハウス!

「くっ……」

迫ってくるバチユル達

1匹、2匹、3匹……

かるく20匹はいる

もしかしたら、30匹いるかもしれない

あたしだけで30匹はムリかも……

事の発端は小1時間前にさかのぼる

レミとノアと別れたあたしはところどころにある看板を目印に進んでいった

だが途中でモンスターハウスと呼ばれる場所を通る際にバチユルを踏んでしまった

バチユルたちの怒りを買ったあたしは戦うことになった

だが……

多勢に無勢とはこのこと

できるのは自分の身を守る技を出すくらいだけ

「っ!」

一か八かで強行突破しようと走り出す

だがすぐ四方を囲まれる体制になる

「なっ……」

すばやい動きに手も足も出ない

無理に動くのは危険だ

と、そのとき!

後ろから1匹のバチユルが飛び掛ってきた

それを合図のようにバチユルが大勢で飛び掛ってくる

「きゃあっ!?!」

もうだめだと目を瞑ったとき……

バチンッ

何かが跳ね返る音がした

目を開くとそこには異様な光景があった

あたしの周りは薄い何か、もやもやしたものがあつた

しかもバチユルはそれに跳ね返されてる

バリア？

「霧のバリアだよ」

不意に後ろから声をかけられて驚いた

振り返るとそこには1匹のピカチュウがいた

いつの間に後ろに……

「しかしこのポケモンたちもだめだね、こんな低レベルな幻覚に惑わされるなんて」

幻覚？

何のことか分からない

ピカチュウがあたしに言った

「手をバリアのほうに伸ばしてごらん」

あたしは言われたとおり手を伸ばす

手はバリアをいとも簡単に通り抜けてしまった

「ほらね、普通のポケモンならこんなの空気と同じ風にしか捉えられないだけど理性を失うと見えないものに疎くなって幻覚に弱くなるんだ」

ちんぷんかんぷんだ

「ちよつと難しかったかな」

ピカチュウはそう言ってバリアを解いた

すぐさまバチユルが襲い掛かってくる

「霧雨」

ピカチュウが言う

次の瞬間、バチユルが全員倒れた

ほんの一瞬の出来事で何が起きたか分からない

分かったことはこれで戦うべき相手がいなくなっただけのこと

「あ、ありがとう」

ピカチュウにお礼を言う

「いえいえ、そういえばまだ名乗ってなかったよね」

あたしはうなづく

「僕はアルト、見てのとおりピカチュウさ」

「あ、あたしはある、今はプラスルだけど元人間だよ」

「そうなんだ、じゃあ君も特別な能力チカラを持ってるんだね」

「能力・・・？」

そんなの初めて聞いた

「まあ時が来れば分かるよ」

あたしは微妙な気持ちになった

その『時』っていつ来るのかな？

「あいるはこれからギルドに行くの？」

「うん、アルトは？」

「僕は東の国さ、“光と闇の戦い”が行われる場所だよ」

「戦い・・・？」

「戦争だよ、だから東の国に近づいちゃダメだよ」

アルトの威厳のある言葉にあたしはうなづかざるを得なかった

「じゃあ、僕は行くよ」

「あ、あの、本当にありがとう！」

アルトはちよつと笑っていった

「どういたしまして、気をつけてね」

「うん！」

アルトはあたしに背を向けて去っていった

さ！あたしはギルド？に行かなきゃ！

あたしは森の道に沿って歩き出した

向こうにある建物が大きく見えてくる

と、同時にあたしの心の中で何かがざわついた  
さっき聞いた“光と闇の戦い”のこともしれない  
でも今の時点ではまだ何も分からなかった

そう考えているうちに森は終わり、目の前には一面の草原とあの建  
物があった

あたしはギルドに向かって走り出した

## 2話 モンスターハウス！（後書き）

最近、更新ペース上がってきました！

この調子で落ちなければいいと思います^^

いつも読んでくださる方に感謝です！

### 3話 ギルドとソルレイク

ギルドの前に着いた

「でか・・・」

あたしは建物の大きさに圧倒されてた

この建物にどれだけのポケモンがいるんだろう  
そんなことを考えていたらいきなり声が出た

「ポケモン発見！ポケモン発見！」

あたしはびっくりして固まった

「だれのあしがた？だれのあしがた？」

謎の声は話し続ける

「あしがたはプラスル！あしがたはプラスル！」

そこで声は止まった

何？今の・・・

あたしはきよるきよる周りを見渡した  
誰もいない

「あれ？君どうしたの？」

またいきなり声が出てびっくりした

「ごめんごめん、驚かせちゃったよね」

私は声のしたほうを見る

今度はちゃんと声の主がいた

声の主はエルフーンだった

隣にはドレディアもいる

「このギルドに来るのは初めて？」

「あ、う、はい」

「じゃあ案内してあげるよ」

案内より親方って人に会いたいんだけど・・・

すると、それまで黙っていたドレディアが話し出した

「親方様のところに行きたいの？」

あたしは驚いて声も出なかった

それどころか耳すらも動かさなかった

「レイア！また心読んだだろ！」

「だって困ってた様子だったから、つい……」

「『つい』じゃねーよ！ごめんな！」

「あ、はあ……」

何、この人心読めるの？

「うん」

また私の心のつぶやきに答えてきた

隣ではエルフーンがしょうがない奴だ、とでも言いたげに首を振る

「私、その人の目を見ると心の声が聞こえるの」

「そうなんですか」

反応しにくいことを言われてしまった

すごい……じゃないし、へえ〜じゃなれなれしいし……

ドレディアはちよつと笑った

でも何も言わなかった

「で、君は親方様に会いに来たんだろ」

エルフーンが聞いてくる

「はい、そうです」

「じゃあおいでよ、連れて行ってあげる」

そう言っさつさとギルドの中に入る

「私たちも行くこうか」

そう言っでドレディアも入る

あたしも置いていかれないように中に入った

コンコン

「親方様、失礼します」

そう言っでエルフーンが部屋のドアを開ける

「今日はどんな用事なの？」

「今日は客人を連れてきました」

「あら、そうなの」

「さ、入って」

エルフィンに背中を押された

「し、失礼します」

あたしは部屋に入った

シンプルで無駄にゴテゴテしてない部屋にそのポケモンはいた

「あなたが親方様ですか？」

そこにはスイクンがいた

「やだ、私のことはセイラでいいのよ」

え？何かイメージが合わない？

スイクンってこんなミィハーな感じだったっけ……

「アルセウスを倒してからなぜか親方様って呼ばれるようになったのよね」

皆が親方様と呼ぶ理由が分かった気がする

下手に失礼なこと言ったらそのパワーで倒されそうだもんね

「あなたは？」

「あたしはあいるです」

「そう、今日はどうしたの？」

そうだちよつと忘れてた

「あの、あたし元人間なんです、美衣奈と逢いたいんです」

「美衣奈？」

「あたしと一緒に来たマイナンの女の子です」

「そういうことなのね……、分かったわ」

おやか……じゃなくてセイラさんは戸棚の方へゆき、何かを取り出した

「さあ、行きましょう」

「行くって何処にですか……うわあっ！」

あたしはセイラさんの背中に乗せられた

「しっかりつかまってね」

そう言つてセイラさんは部屋を飛び出す

そのまま窓から外に出た

「ええええええ!?!」

「こつちの方が早くていいのよ」

急に親方がいなくなつたらどうなるんだろつ・・・

セイラさんは草原を飛ぶように走る

景色がどんどん流れていく

しばらくすると目の前に大きな湖が見えてきた

「あの湖はソルレイク」

「ソルレイク?」

「思いを映す鏡とも呼ばれるわ」

「鏡・・・」

セイラさんは湖の上を走る

ちよつとこれは新感覚

地の上を走るのはまた違った振動が伝わってくる

真ん中の陸地でセイラさんは止まった

「さ、着いたわ、降りて」

私は背中からぴょんと飛び降りた

「その子、なんて名前だつたかしら」

「美衣奈です」

「そつだつたわね」

セイラさんは湖の中に丸いものを入れた

「思いの鏡、美衣奈と呼ばれしものの現在いまを伝えたまえ」

そう言つと湖の一部、さつき丸いものを入れたところが光つた

「ここにその子の今が映るわ」

あたしは湖を覗き込んだ

### 3話 ギルドとソルレイク（後書き）

湖に映ったものとは一体……!?

結局ペースダウンですw

これからはさらに遅くなるかもしれないし早くなるかもしれないです  
そこるところご了承ください

#### 4話 闇の組織

湖には草原が映っていた  
草原には1匹のマイナン

「あれが美衣奈？」

「映し出してるということとはそういうことね」  
美衣奈の前からライチュウが近づいてくる  
今思ったけど音が無い

音はきつと伝わらないんだ

ライチュウと話したあと、ライチュウと一緒に歩き始める

「そういうことね・・・」

セイラさんが言う

何か分かったらしい

あたしはずつと湖を見てた

突然草原が小さくなった

時間切れだ

結局美衣奈が何処にいるのか、何を思っているか分からなかった

「あいる、美衣奈はこの国へ向かってるわ」

「国？」

「ええ、簡単に言うと西の国ね」

「そうなんですか」

「上手くいけば思ったより早く再開できそうよ」

「本当ですか！」

「ええ、じゃあギルドに戻りましょう」

あたしはセイラさんの背に乗る

セイラさんは来たときより速いスピードで帰る

「なんでそんなに早く帰るんですか？」

「もうすぐ夜だからよ」

「夜だから？」

「詳しいことはギルドで話すわ、時間がないの」  
そう言つてさらにスピードを上げる  
あつという間にギルドに着いた

「あー！親方様何処行つてたんですか！」  
ドアを開けるといきなり大声が聞こえた

「午後は書類に目を通してつて言ったじゃないですか！」  
声の主はヒノアラシ

「ごめんなさいね、急用が出来たものだから忘れてたわ」  
「しっかりとってくださいよ・・・」

ヒノアラシはため息をつく  
そして顔を上げてあたしを見る

「そういえば君、誰？」

「この子はある、元人間よ」  
セイラさんが答える

「お客様でしたか、僕はカノンです、よろしくお願いします」

「こちらこそよろしくお願いします」

セイラさんがカノンさんに何かを伝える

小さい声で聞き取れなかった

「分かりました」

「じゃあ説明できなかったことを話すから私の部屋に行きましょう」  
セイラさんに強引に連れてかれる

「親方様！書類はどうするんですか！」

「後でやるわ」

「そんなあ〜！」

後ろでカノンさんの絶叫が聞こえた

「うるさい奴でごめんね」

「いえ、大丈夫です」

うるさくなるのはセイラさんが元凶のような・・・

「で、どこから聞きたい？」

「え？あ、そうですね」

私は今日のことを思い出しながら考えた

「どうして早く帰ったか知りたいです」

「分かったわ、ちよつと話が長くなるけど・・・」

セイラさんが話したのはこういうことだった

この世界を100%とたとえると生物が住めるのはたったの40%の部分に過ぎない

残りの60%は暗黒物質とか暗黒エネルギーとかいう有害な物質が充満していてとても住める状況じゃない

だが、最近暗黒物質に抗体のあるポケモンがそこに住み始めた

暗黒物質を使い、人の精神を操るようになった

奴らは夜になると現れ人々を襲う

「だから夜になる前に帰るの」

「そうなんですか」

窓の外はもう真っ暗

この闇に敵が潜んでると思うとゾツとする

「後はない？」

「あ、もう一つあります」

あたしはさっきの話で気になったことを言ってみた

「その『奴ら』って名前とかあるんですか？」

「あるわ、確か『ヌーヴォラ・ネツビア』だったわ、略してヌーヴィアとか」

ヌーヴォラ・ネツビア

イタリア語で雲、霧

あたしは嫌な予感しかなかった

「後はいいい？」

「あ、はい、ありがとございました」

「じゃあ今日はもう休みなさい、来たばかりで疲れたでしょう」

そういえば今日、ここに来たんだっけ

いろんなことがあって1日は経ったような気がしてた

「あなたの部屋は2階の札のかかってない部屋よ、カノンに聞けば分かるわ」

「はい」

あたしはドアのほうへ行く

「そうそう、忘れてたわ」

「へ?」

「はい、これ」

そう言っつてセイラさんはあたしに何かを投げしてきた

「わっ、と」

あたしはギリギリでキャッチする

「部屋に行ったら見なさい」

あたしはうなづく

「じゃあ、あたしはこれで・・・」

あたしはあいさつも適当に部屋を出た

「カノンさん」

何かを書いていた彼は顔を上げる

「ああ、あいるさん、どうしましたか?」

「2階の札のかかってない部屋に行きたいんですけど・・・」

「それなら案内します、の前に・・・」

そう言っつて後ろを向き何かをした

何かを探してるらしい

「さ、行きましょう」

カノンさんは立ち上がり歩き始める

あたしは置いていかれないように慌ててついて行った

「このアレインギルドはとても広く、中でおよそ2000人のポケモンが暮らしてるんです」

「2000人!?!」



さつき探してたのはこれかな

「じゃあ、詳しいことはこのリーダーに聞いてください」

「リーダー？」

「ええ、朝になれば会えますよ、ではこれで」

「あ、ありがとうございます！」

「いえいえ」

そう言つてカノンさんは部屋を出て行つた

あたしは改めて部屋を見る

家具などはあまり置いてなく、窮屈さを感じない

机の上にはノートと筆箱、鍵が置いてある

その鍵にも『あいる』と書かれたキーホルダーがついている

いつの間に……

ベットに腰掛ける

んゝ、ふわふわ

あたしはすかさず毛布にもぐりこむ

何これ、ふわっふわで気持ちいい

あたしはそのまま眠ってしまった

#### 4話 闇の組織（後書き）

なんやかんやでギルドの所属することになったあいる  
てかセイラさんテキストw

次回、2階に住んでるメンバーを紹介するかも……

## 5話 2階の住人

「ん……」

目が覚めた

自然に目が覚めるなんて久しぶり

時計を見ると7時

皆もう起きたのかな

あたしはベットから出て鏡を見る

「うわ……」

何か頭のところハネてる

えっとブラシ、ブラシ……

洗面台の隅っこにブラシはあった

梳かしてみたら直った

よし、これでOKだよ

コンコン

「は〜い」

誰か来たからとりあえず出る

ガチャ

「おはよう〜!」

「はじめまして〜」

目の前にはイーブイとフシギダネがいた

「えっと?」

「昨日来た新入りっていうから気になつてきたのさ!」

どこの情報だろう……

「朝ごはん、まだ食べてないよね?一緒に食べない?」

「え、あ、邪魔じゃなければ……」

イーブイとフシギダネは顔を見合わせてプツと笑った

「邪魔なわけないだろ!」

「さ、行こう!」

あたしはちょっと強引な2人に連れて行かれた

「ところであなたたちは？」

ダイニングでおしゃべりする

「あつ、そうだ私たち自己紹介してない！」

「そうだったな、オレはレン」

イーブイが言う

「私はナタネ、よろしく！」

フシギダネも言う

「あたしはある！よろしくね！」

気がついたらタメ口になってた

何か言われるかも、って思ったけど言われなかった

「オレたちはソロなんだけどおまえもか？」

「うん」

「初めてでしょ、何かあったら聞いてね！」

「ありがとう！」

あたしは嬉しくなった

初対面で仲良くなれると思わなかったから

「3人ともおしゃべりばかりしてないで食べて！」

ライチユウに注意される

「はあ〜い」

あたしたちは食べ始めた

「あの人は？」

あたしはライチユウを手で示しながら聞く

「ん、ちよっほまっへ」

ナタネは木の実を口いっぱいにはおぼりながら言う

「もぐもぐ・・・うん、あの人はルミさん、みんなのご飯を作ってくれてるの」

そう言いながらよそ見しているレンのお皿の木の実に手を伸ばす

「ナタネ！」

レンに手をたたかれる

「うう、ばれないと思っただのにい」

ナタネはお皿の端っこをつつつく

「あたしのいる？」

あたしはナタネにお皿を差し出す

「いいの！」

ナタネは急に元気になった

「うん、あたしもうおなかいっぱいだし」

「わーい！いったただっきまーす！」

あつという間に木の実をたிரらげる

「ありがとう、あいる！」

「ううん、いいよ」

「まったく、食い意地はつてばかりだよな・・・」

レンが自分の分を食べ終えて言う

「ばっかりじゃないもん！」

「へ、じゃあ依頼もちゃんとこなしてくださいよ」

「むう」

「食べ終わったら食器片付けてちょうだい」

ルミさんにまた注意される

「ケンカしてる暇があったら1つでも多くの依頼をクリアしなさい

！」

最後には怒られる

あたしたちはダイニングを後にした

「じゃあまずはリーダーの部屋に行こう」

「リーダー？」

昨日も聞いたけどリーダーって何だろう

「この階の親方みたいなかんじ！ほら、2000人を1人でまとめるのは大変でしょ？」

確かに仕事の量がとてつもなく多くなりそう・・・

「だから階ごとにリーダーがいるの」  
「そうなんだ」

「ここが2階のリーダー、ロコさんの部屋だよ」  
「コンコン」

「ロコさん、新入りの子を連れてきました」  
「どうぞ入って」

「失礼します」

ナタネはさつきとは変わって礼儀正しい  
「失礼します」

あたしもナタネのまねをして入る

「あなたが、新メンバーのあいるね」

「はい」

あたしはロコさんを見た

ロコさんはエネコロロだった

「東棟2階のリーダーロコです」

「あ、あいるです」

何言ったらいいかわからない

「今日はどんな用で？」

これにはナタネが答えた

「あいるに依頼のこなし方を教えたいんです」  
え？

そんなこと初耳なんだけど・・・

「そうね、まずはナタネについて行っている教わるといいわ」

「分かりました」

ナタネがドアへ向かう

「失礼しました」

あたしも慌てて言う

「失礼しました！」

「はあく、キンチヨーしたく」

「そつだね」

部屋を出て歩きながら話す

「ロコさんはお嬢様だから礼儀とか作法についてはすごく厳しいんだ」

「へえ」

お嬢様でギルドのリーダーもすごいと思う

「今日は私と一緒にでしょ、ちょっとリュックもってくるね！」

そう言っつて自分の部屋へ入っつていく

30秒くらいで出てきた

背中にはリュックをしょつてる

「これには地図とかいろいろ入つてるんだ！」

「そつなんだ」

「でも戦うときはおろさなきゃいけないからちよつと不便・・・」

ナタネが不満そつな顔になる

でもすぐ笑顔に戻つて言う

「さ！冒険をしよう！」

## 5話 2階の住人（後書き）

結局4人しか説明できませんでした（汗）  
次回、また増えると思います^^  
これから先また更新遅くなると思います  
気長に待ってくださいると嬉しいです！

## 6話 禁断の館

「じゃあ、今日は『禁断の館』ってところに行こう!」

「禁断の館……?」

怪しい二オイしかしない

「昔、大富豪が住んでいた家のことだよ!いつもいいものが見つかるんだ」

「そこつて入ってもいいの?」

あたしの質問にナタネはちよつと考えるしぐさをしたけどすぐに言つた

「先輩たちも行つてるしいいでしょ!」

そついうものなのかな……

「とりあえず考えるのはあとあと!さあ、しゅっぱーつ!」  
何かとんでもないことになりそつな予感……

30分後、予感的中した

「きゃあつ!」

「ナタネ!」

振り返るとナタネが黒い影に飲み込まれていった

「ナタネ!」

「あいる!逃げて!」

そつ言いながらナタネは消えた

「……つ!」

館の中でよく分からない部屋の扉を開いた

すると扉の隙間から黒い影が出てきた

急いで閉めたものの後の祭り

館の中を逃げ回つた結果、ナタネが捕まつてしまった

あたしは拳を握り締めた  
何か解決方法があるはず

こうしている間にナタネに何かあったらどうしよう  
あの黒い影、生気吸ったりしないよね  
あー、もう！

どうして何も思い浮かばないんだろう  
何か、何でもいいから思いつかないの！？

館をぐるっと見回して思った

この館、カーテンが全てきっちり閉まっている  
そのせいで館の中は薄暗い

外は明るいというのに  
もしかして……

光に弱かったりするのかな

一か八か、カーテンを開けてみよう

一番近い窓に近寄り、カーテンを開く  
シャツ

外は予想以上に明るくて闇の中にいたあたしにとっては何十個もの  
証明を一度につけたような感じだった

あたしはひるみながらも次々とカーテンを開けていった

「ギヤアツ！！」

悲鳴で振り返ると日の当たったところにぼんやりと影みたいなの  
がいた

あれがナタネをさらった黒い影だ

あたしは影めがけて技を撃った

「10万ボルトッ！」

電撃の塊は影に命中した

「ギヤアアアアア！！！」

影はすごい悲鳴を上げながら消えていった  
消えた後にはナタネが残った

「ナタネ！」

急いで駆け寄る

意識は無いけど心音は聞こえる

あたしはナタネをおぶってギルドへと急いだ

「セイラさんっ！」

あたしは入り口でカノンさんと話していたセイラさんに声をかけた

「あいる？どうし……」

セイラさんはナタネを見てうなづいた

「カノン、救護室に先生はいたかしら」

「今はいます」

「じゃあ救護室に運びましょう」

そう言っつてセイラさんはナタネとあたしを背に乗せて救護室へ向かった

「かなり衰弱してますが命に問題は無いですよ」

「そうですか」

あたしはホッと息をついた  
よかった

「じゃあ後は頼みます」

「セイラさ……」

「あいる、話があるわ」

言おうとしたことをさえぎられた

反論しようと思ったけどセイラさんの眼が真剣だったからヤメた

「はい」

あたしはセイラさんに続いて救護室を出た

「失礼しました」

## 6話 禁断の館（後書き）

話思いつかないですorz

でもミーナ編に比べれば更新ペースはあがってます！  
ハンパに終わってすみませんでした

## 7話 新しい友だち

「あなたとナタネは何処に行ってたの？」

「禁断の館？に行つてました」

セイラさんの目つきが厳しくなる

「2階東棟の人にはあれほど近づくなといってるのに!!」

あたしは怖くて何もいえなかった

これが、親方様なんだ・・・

「あいるは止めなかったの？」

「止めようとはしました、でもナタネが大丈夫と言うし、どんな場所

か分からなかったもので・・・」

「そう・・・、そうよね」

「はい、すみませんでした」

あたしは素直に謝った

あの嫌な予感がしたときにすぐに言えばよかったんだ

コンコン

「親方様、失礼します」

そう言つて入つてきたのはカノンさん

「どうしたの？」

「ギルドの前でリオルが倒れてまして・・・」

「それで、どうしたの？」

「救護室に運んでいきました、先生がセイ・・・いえ、親方様とお

話したいと言つてます」

「分かつたわ、すぐ行く」

セイラさんはあたしを見て言った

「あいるは部屋に戻つていいわ、時間をとらせて悪かつたわ」

言い終わると同時に部屋を出て行った

「セイラさん忙しいんですね・・・」

「そうですね、ここは人数も多い上に訪問者も多いですから・・・」

あたしはセイラさんをどう見てたんだろう  
親しみやすくついでに甘えていた気がする

セイラさんは親方様であたしはただのポケモンなのに・・・

「あいるさん、2階東棟はどうですか？」

カノンさんが話題を変えてくる

彼なりの気遣いだろう

「えっと、そうですね、明るい人ばかりでとても親しみやすいです」

「そうですね、それは良かったです」

カノンさんは言う

「少し外に出てはどうでしょう、気分が晴れるかもしれませんよ」

「そう・・・ですね」

あたしはカノンさんに言った

「カノンさん、ありがとうございます」

カノンさんはただ微笑んでいた

あたしはギルドの裏の丘にいた

まだ陽は高い

そういえばお昼ご飯を食べてない、けど・・・

「はあ〜」

あたしはため息をついた

今はとてもじゃないけど何かを食べる気になれない

特にシヨックなことも無かったと思うんだけど食べたくない

ただぼーっとしてたい

そのとき、目の端で何かが動いたのを捉えた

そちらを見てみると1人のイーブイがこちらをジッと見てた

「えっと・・・座る？」

あたしは自分の横の椅子を指差して言った

イーブイはうなずいて近寄って来た

そしてあたしの横に座った

「私ニーコ、あなたは？」

「あたしはあいる」

「あいるは何処から来たの？」

ニーコはすぐさま質問してくる

「人間界から来たんだ、ニーコは？」

「私も人間界から来たの」

そう言うニーコの横顔があまりにも寂しそうであたしは何も言えなくなつた

「私ね、1回死にかけたんだ」

「え……？」

7話 新しい友だち（後書き）

何で死にかけたんでしようかつ!!  
それは次回のお楽しみ

ニッコの過去は短編でも書きたいと思います!

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7267t/>

---

記憶のカケラ

2011年10月13日16時49分発行